

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02888

研究課題名(和文) 植民地期PALOPにおける主食作物栽培とその社会的影響に関する研究

研究課題名(英文) Study on the Cultivation of Staple Food Crops and their Social Influence in Colonial PALOP

研究代表者

石川 博樹 (ISHIKAWA, HIROKI)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：40552378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：アフリカ大陸においてポルトガルは広大な植民地を領有していた。ポルトガルの植民地であったアンゴラをはじめとするアフリカ諸国は、「ポルトガル語公用語アフリカ諸国(PALOP)」と呼ばれる。本研究課題では、ポルトガル植民地支配末期にPALOPで刊行された農業センサスの収集および調査を行うことにより、ポルトガル植民地支配期のPALOPにおける主食作物栽培の状況について、特にキャッサバをはじめとする新世界産作物を中心に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Portugal possessed large colonies in Africa. Angola and other former Portuguese colonies in Africa are called PALOP (Portuguese-speaking African Countries). The purpose of this study is to reveal the cultivation of staple food crops, especially crops indigenous to New World such as cassava, in PALOP under the Portuguese colonial rule, by collecting and researching agricultural census, published in PALOP at the end of the Portuguese colonial rule.

研究分野：歴史学

キーワード：アフリカ ポルトガル 歴史 植民地 農業

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は長らくエチオピア語史料およびポルトガル語史料を用いて 19 世紀以前のエチオピア史研究を行ってきた。その中で、ポルトガル語史料がエチオピアのみならず、アフリカ大陸他地域の歴史を研究する上でも有用であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかったこと、主食作物に関する歴史学研究がアフリカ大陸の歴史を研究する上で極めて重要であることを痛感した。

このような問題関心にに基づき、申請者はアフリカ大陸中央部に位置するアンゴラにおけるキャッサバの普及過程の解明をテーマとする研究課題を申請し、2011 年度から 2013 年度にかけて「ポルトガル語史料を用いたアフリカにおけるキャッサバの普及に関する歴史学研究」(科研費若手研究(B)課題番号 40552378)を実施した。

本研究の主要史料となったのが、ポルトガルによる植民地支配末期にアンゴラで刊行された『アンゴラ農業センサス *Recenseamento Agrícola de Angola*』である。研究代表者は本センサスの大半を入手し、キャッサバに関する記載情報の収集・分析を行った。

この研究課題の実施を通じて研究代表者は、研究の蓄積が乏しいポルトガル植民地支配期の PALOP における主食作物栽培の歴史の変遷とその社会的影響の解明にあたっては、研究対象をアンゴラだけではなく、PALOP 全体に拡大して比較検討を行う必要があるという結論に至り、本研究課題を申請し、実施するに至った。

2. 研究の目的

アフリカ大陸においてポルトガルは英仏に次ぐ広大な植民地を領有していた。第二次世界大戦後、英仏等に支配されていた植民地が次々と独立していくなかで、ポルトガルは植民地の保持に固執した。しかし 1960 年代以降激化した独立闘争の結果、1970 年代半ばに各植民地は次々と独立した。

ポルトガルの植民地であったアンゴラ、モザンビーク、ギニアビサウ、カーボヴェルデ、そしてサントメ・プリンシペは、独立後もポルトガル語を公用語としており、「ポルトガル語公用語アフリカ諸国 Países Africanos de Língua Oficial Portuguesa(略称 PALOP)」と呼ばれる。

近年石油や天然ガスといった鉱物資源の生産によって注目される PALOP であるが、各地域において歴史的に主要な産業であったのは農業である。PALOP は、南米のブラジルをも領有したポルトガル人の植民地支配を受けたために、アフリカ大陸においてキャッサバをはじめとする新世界産主食作物が比較的早い時期に導入された地域であった。

新世界産主食作物については、それらの普及が人口増加を促し、植民地支配期の都市

化の進展を支えるなど、重要な社会的影響を与えたことが、アフリカ大陸の英領や仏領を対象とする研究においてすでに指摘されている。

農業を含む植民地支配期における PALOP 経済の研究は、宗主国であったポルトガルにおける研究体制の不備、1960 年代初頭に始まった解放闘争による混乱、アンゴラおよびモザンビークにおいて独立後すぐに開始された内戦などの悪条件が重なり、他のヨーロッパ諸国の植民地に比べて立ち遅れている。

これまでに行われてきた研究においては、ポルトガル本国との関係を中心に、鉱物資源の開発、コーヒーや綿花といった輸出用換金作物栽培が主に注目されてきた。主食作物の栽培に関する研究の蓄積は乏しく、植民地支配下の PALOP における主食作物栽培の歴史の変遷とその社会的影響については未解明の点が多い。

このような背景のもとで実施した本研究課題が目指したのは、ポルトガル植民地支配期 PALOP の主食作物栽培の歴史の変遷とその社会的影響について、特に新世界産主食作物に着目しながら解明することであった。

そのためにまずポルトガルによる植民地支配末期に刊行された農業センサスを基にして、当時の PALOP における主食作物の栽培状況を明らかにすることを第 1 の目標とした。さらにその結果とポルトガル植民地支配期の他の資料から得られる情報を比較検討することにより、新世界産主食作物栽培の歴史の変遷とその社会的影響を明らかにすることを試みた。

3. 研究の方法

本研究課題では、まずポルトガル植民地支配期末に PALOP において刊行された農業センサスを収集し、各農業センサスにおける新世界産主食作物の栽培状況に関する情報を抽出・分析することを第 1 の目標とした。次いで、上記農業センサス以外の、植民地支配期の PALOP における新世界産主食作物の栽培と消費に関する情報を収集することを第 2 の目標とした。さらにそれらの成果を統合することにより、PALOP における主食作物栽培の歴史の変遷とその社会的影響について、特に新世界産主食作物に注目しながら解明することを最終的な目標とした。

4. 研究成果

本研究課題の重要な史料となるのが、ポルトガルによる植民地支配末期に PALOP で刊行された農業センサスである。研究代表者は『アンゴラ農業センサス』の大半についてはすでに入手しており、本研究課題では、他の PALOP 諸地域の農業センサスの所蔵調査および収集をまず行った。

各年度の史料調査および研究の実施状況は以下の通りである。

まず研究初年度の 2015 年度は、ポルトガルリスボン市の熱帯科学研究所 (Instituto de Investigação Científica Tropical) 傘下の資料情報センター (Centro de Documentação e Informação) と海外領土歴史文書館 (Arquivo Histórico e Ultramarino) において、PALOP の主要国の 1 つであるモザンビークにおいてポルトガル植民地支配末期に刊行された『モザンビーク農業センサス *Recenseamento Agrícola de Moçambique*』の所蔵調査を行うとともに、全頁を複写し、その内容分析を開始した。

研究 2 年度目の 2016 年度は、主に資料情報センターにおいて、ポルトガル領ギニア (現ギニアビサウ) においてポルトガル植民地支配末期に刊行された『ポルトガル領ギニア農業センサス *Recenseamento Agrícola de Guiné*』、同じくカーボヴェルデで刊行された『カーボヴェルデ農業センサス *Recenseamento Agrícola de Cabo Verde*』、サントメ・プリンシペで刊行された『サントメ・プリンシペ農業センサス *Recenseamento Agrícola de S. Tomé e Príncipe*』の所蔵調査および複写の入手を実施した。

しかし資料情報センターの閉館時間が大幅に短縮された結果、すべての作業を終えることができなかった。そのため 2017 年度に引き続き資料情報センターおよび海外領土歴史文書館で作業を継続し、『ポルトガル領ギニア農業センサス』『カーボヴェルデ農業センサス』『サントメ・プリンシペ農業センサス』の所蔵調査、および刊行されている巻の全頁の複写を完了した。

PALOP 農業センサスに関する調査とともに、リスボン国立図書館 (Biblioteca Nacional de Lisboa) および海外領土歴史文書館において、ポルトガル植民地支配期の PALOP における主食作物の栽培と消費に関する情報の収集も可能な限り進めた。

以上の史料調査と並行して、入手済みの PALOP 農業センサスの内容分析も進めた。PALOP 農業センサスでは「農業区 *zona agrícola*」という単位が用いられており、1 つの農業区に対して「伝統農業」と「企業農業」という 2 種類、計 2 巻のセンサスが刊行されるという構成が基本になっている。各巻は「0. 序文」「1. 基準と方法」「2. 調査結果」に分かれ、「2. 調査結果」は 8 つのセクションで構成される。その中で「第 2 セクション：栽培」に各農業区の栽培作物の作付面積や収量等の情報が記載されている。

本研究課題が対象とする新世界産主食作物であるキャッサバ、トウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモ、そして比較のために、新世界産ではない主食作物であるモロコシ、トウジンビエ、シコクビエ、コムギ、コメ、ヤムイモについて、各農業区の情報を出してまとめ、ポルトガル植民地支配末期の PALOP における主食作物の栽培状況を明らかにした。

また PALOP 農業センサスに関する史料研究も行った。PALOP 農業センサスのうち、『アンゴラ農業センサス』は 1964 年から 1971 年にかけて 35 巻、『モザンビーク農業センサス』は 1961 年から 1966 年にかけて 11 巻、『ポルトガル領ギニア農業センサス』は 1963 年に 1 巻、『カーボヴェルデ農業センサス』は 1968 年に 2 巻、『サントメ・プリンシペ農業センサス』1968 年に 2 巻が刊行されている。多数の巻が刊行されている『アンゴラ農業センサス』にしても北西部や東部の巻は刊行されていない。このような刊行状況が示す歴史的背景、またそもそも一連の農業センサスが刊行された歴史的背景についても調査を行った。

本研究課題の成果公開としては、まず日本アフリカ学会第 54 回学術大会 (2017 年 5 月 20 日、於信州大学) において「ポルトガル植民地期 PALOP における南米原産作物栽培：アンゴラとモザンビークを中心に」と題して口頭発表を行った。

次に PALOP 農業センサスの史料研究の成果を論者にまとめており、日本アフリカ学会の学会誌『アフリカ研究』に投稿する予定である。また本研究課題で明らかになったポルトガル植民地支配末期の PALOP における南米原産主食作物の栽培状況と、各地への南米原産作物の導入および普及の過程に関しても学術論文として投稿する準備を進めている。

この他に本研究課題で得た知見を基にして、石川博樹・小松かおり・藤本武編『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』(昭和堂、2016 年 3 月 31 日) を出版した。また地域研究コンソーシアム (JCAS) 2016 年度ワークショップ (2016 年 11 月 6 日) において「一皿のなかの歴史：歴史学研究与地域研究」と題して研究者向け講演を、京都大学アフリカ地域研究資料センター第 221 回アフリカ地域研究会 (2016 年 10 月 20 日) において「食と農のアフリカ史：アフリカ史研究の可能性を探る」と題して一般向け講演を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1 件)

石川 博樹「ポルトガル植民地期 PALOP における南米原産作物栽培 アンゴラとモザンビークを中心に」日本アフリカ学会第 54 回学術大会 (2017 年 5 月 20 日、於信州大学)

〔図書〕(計 1 件)

石川 博樹、小松 かおり、藤本 武 (編)『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』昭和堂、2016 年 3 月 31 日 384 頁。ISBN 9784812215241

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 博樹 (ISHIKAWA, Hiroki)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文
化研究所・准教授
研究者番号：40552378